

第2節 100人委員会の取り組みの様子

100人委員会の取り組みの中で、委員の方々は毎回どんなことを感じながら取り組まれていたのでしょうか。流れに沿って主な内容について振り返ってみます。

1. 課題の整理 地域の声にふれる

はじめに、地区座談会で出された課題の整理を行いそこで出された合計4,854件の課題・意見を、あらかじめ7つのテーマに分類しました。第2回目ではそれをもとにグループ内で自分たちのテーマについて話し合い、イチゴパックを使って一つ一つの意見を種類分けして、それぞれのイチゴパックに見出しをつけていきました。地区座談会で出された意見の数は1つのテーマにつきおよそ500～800件。山のような意見を目の前にし、委員会の会場にいた委員も職員も、「まとまっていくのだろうか…」という不安と「どのような展開となるのかな」という期待の両方を持ち合わせたような気持ちでした。

この時、同じテーマを話し合う仲間となってはじめての、具体的なグループでの作業となりました。そのため、遠慮する人、理解できずに苦勞する人など委員のみなさんの様子も様々でした。しかし、一人ひとりの想いの違いが一つの意見を分類していく際にもあらわれ、それをきっかけとして議論が進んでいきました。

1グループは「健康・障がい・その他」というテーマでしたが、1グループに割り当てられた地区座談会での意見のうち「その他」がおよそ半分を占めていたため、分類の作業では特に苦勞しました。地区座談会での意見は、日頃感じている身近なところから出されているため、その内容は多岐にわたっていました。作業の中では、「伝統芸能はその他に入っていたが教育とか文化のほうにまわせばいいんじゃない?」「『文化』というグループがないから結局こっちのグループにまわってきたんだろう」といったやり取りを交わし、一つひとつの意見を丁寧に読み込みながら作業を進めていきました。

2. 中目標の設定 地域の実情から考える理想の姿

「私たちの目指すまちをイメージする」をテーマに、「理想の松阪市とは?」「どんな地域に住みたいか、住民たちの活動の理想は?」という地域の理想の風景を思い浮かべました。普段はあまり考えることのない「地域の理想の姿」について問かけられ、委員のみなさんも一度立ち止まって考えました。理想の姿をどのように表現してくのか。難しさはありましたが、様々な表現の方法で、各グループの個性を中目標にあらわしていきました。

「健康・障がい・その他」の12グループでは、「おばあちゃんが障がい者の世話をしている」という中目標があげられています。その言葉を見ただけでは、言葉の

通りの場面しか想像できないかもしれません。しかし、そこには「一緒に集える、『お互いに助け合いながら』という意味も含んでいる」という委員のみなさんの考えがあり、「おばあちゃん」以外の言葉が入ることも十分ありえる、というわけなのです。つまり、この一つの中目標には世代間の交流・近所の助け合いなど、様々な地域の理想が凝縮されているのです。松阪市においても核家族化や近隣関係の希薄化による問題が広がっているという現状を踏まえ、このように具体的な一場面を想像させながらも、実は多くの意味を含んだ中目標が設定されていきました。

「交通」をテーマに話し合った9グループや13グループでは、「松阪の道路はどうだろうか」という問いを出発点に議論を進めていきました。普段自分たちが通る道で感じるということもあって、活発に意見が出されました。「交通の面で松阪市をよくするには何が必要か」という視点から、住民の意識に関することにも話題が及び、一人ひとりのマナーの向上のためにはどのような啓発の方法があるのか、交通安全を進めていくためには地域でどんな取り組みができるのか、という議論がなされました。このような議論を経て、「事故のないまち」が中目標のひとつとして挙げられました。

3. 具体策と地区座談会の意見との関連づけ 理想から見えてきた地域の課題

理想を現実のものとしていくためにはどうすればよいか、それを考えるきっかけとなるのが第4回の委員会での中目標の具体策を考える作業と、第5回・第6回の委員会での中目標の具体策と地区座談会の課題との関連づける作業でした。

グループの中で話し合われた中目標の具体策は、地区座談会での意見にある松阪市の現状と必ずしもつながるものばかりではありませんでした。つながりが見い出しにくいところもありましたが、試行錯誤しながら作業を行っていきました。

「高齢者」の11グループは、介護や高齢者の暮らしに関心のある方が多く集まり、委員自身の普段の生活に基づいた話し合いができました。特に、中目標を具体化した「高齢者を含めた各世代間の交流をはかる」という項目は、地区座談会での課題を分類したものにつながる部分が多くありました。地域の連帯感が薄れ、「昼間家の中にいる高齢者が多いと感じた」というある委員さんの意見から、「高齢者も交えながらのご近所付き合いなど『みんなの輪が広がるようなこと』をしていきたい」という思いが重ねられていることがうかがえました。

10グループ「地域活動」のある委員の方が「どことどこが関連するかを考えていくとすごくつながった」と振り返るように、この作業によって、理想の姿が理想のまま終わってしまうのではなく、今の地域の問題とどのようにつながっているのかを実感すること、そして解決策を探っていくこと、理想の姿にするための方法を考えていくことができました。

「交通」のグループに参加していたメンバーの方は、「いつもとは違った視点から

道路行政を見ることができるようになった。今までは単に危ないと感じるだけだったが、こうしたほうがいいのではという改善点を考えられるようになった。」と日常生活における視点の変化を感じています。このように、地区座談会やグループ内での意見を集約しながら中目標・中目標を具体化したものをつないでいく作業によって、理想のために何ができるのか、何をすればよいのかが見えてきたのです。

4. 発表会 グループの間につながるもの

取り組みの集大成とも言える「100 人委員会発表会」では、各グループが 10 分程度の時間で、これまでの話し合いを 1 つの図にまとめたものや事前に準備した資料をもとに、これまでの話し合いの成果やグループの思いを発表していききました。

他のグループの目標や思いにふれることで、これまで他のグループとあまり関わることのなかった委員さんたちの中にある気づきが生まれました。それは、これまでの過程は全てグループ別で行われていたにもかかわらず、グループ間で共通するものがあるのではないかとということです。松阪市について考える切り口は 7 つのテーマそれぞれで違っても、話し合いを進めていくうちにいつの間にか議論の焦点や目標は同じところへ向かっていたようです。目標としてあらわされた言葉や整理した課題はもちろん同じものではありませんが、この発表会を通じて、100 人委員会のメンバーをはじめ、さらには松阪市に暮らすみなさんの思いには、みんなで共有できるものがあつたことが認識されました。

5. 地域福祉計画編集委員会へ

こうした取り組みを経て、平成 19 年（2007 年）7 月には各グループから 1 名の代表が、「松阪市地域福祉計画編集委員会」の委員として選出されました。100 人委員会で共有された目標を地域福祉計画として具体化していく作業がはじまったのです。



100 人委員会での話し合いの様子